

箱根靈驗躰仇討
攝州合邦辻
仮名手本忠臣藏
御所櫻堀川夜討
脚本合本

088715-000-1

特67-794

箱根靈驗躰仇討・攝州合邦辻・仮名手本忠臣藏・

御所櫻堀川夜討

岡野 美春

植木 嘉七／補綴

M27

DBJ-0374



箱根靈驗覺仇討脚本

故

司

馬

芝

叟

原

作

網野美春 補綴
植木嘉七 全

飯沼勝五郎

非人次郎

妻初花 同 月の輪

奴筆助 同 八

瀧口上野 勿川久馬

初花老母 非人大勢



本舞臺平舞臺上手寺の門前松の立木非人施行と出しある建札正面に瀧あり左右遠山の張物を漏斗に飾り纏て阿彌陀寺門前の模様此みへよろしく雪嵐にて暮あく

直く向ふより勝五郎を車に乗せ初花は引き來り建札をさるめ

初「ア、嬉しや來たわいさア、ト車を留め

申勝五郎様此邊は山家ゆへ紅葉のあるに雪か降無寒かつたてござんせん

勝「イヤ、これば車も居れど辛抱も任よいか大きき體を乗てかよはは、いそあたか引

苦勞過分させや嬉しいそよ

初「アレ又そんな事女房に禮いふ者かどおにあるものそいさアそきはせうと此阿彌陀寺は氏政の菩提所けふの法事を手かゝりに敵の安否を

勝「アエリヤ壁お耳心を付さやいの

初「アイ、ト氣を配るこさし此時上手とり非人次郎月の輪八の三人は酒さけんに

て出来る

初「チャ次郎様八様月の輪様よい貰ひかあつたやら打揃ふてといさけん施行はまた

あるかへ

次「何しや施行はまたあるかさいか往て見りや去れるでい一体マア此次郎様にすの

らくぬかすはト、といのまやいぐ

月「アハ、い、こいつはめんよう喰ひしめると腹立をるニヨヤナイありや璧の女

夫しやはい

次「何まやいさりの女夫しやサ、それかけたいまや一体マアあいつの璧たてら何て

あんきよい女房持てけつかるのまやけたいか悪ふて腹か立わい其上また業の滯

はけふの施行トや仰山を札建上つて米さらたつた二合ウ三合かくれあうるのて

あらふと思ふたはエイカ所を一人前にまんだ一つしやの其上さすまで引いて

終に喰た事をき結構な料理まで振舞ひあつたはわけかまねぬまやさいのそ

れてねりや腹か立てくはらはたくに返るわい

月「ワツハ、い、い、い、食一生にさい錢一貫位貰ふてまみてさい上白たらふく

吞て結構な料理までいたゝぬたか何の腹の立事をいハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ

八よ

八「チ、そうともく一文の錢をらふさへ五丁七丁ついてもくまぬ世の中こんき結

構き法會に合といふは何たる有かたし事しやと思へはねりやもふありかたふて

く嬉し涙かこはれるでい トまぐく泣くこま

月「ワツハ、い、い、こいつは又腹おるの色々のけれどもあるもんしやハ、ハ、ハ、ハ

八「ユリヤ月の論わりや何かたかいそいこんお結構な法事する人さへあるにおれ
 は身上呑ちけ兩親の彼岸に當つても油揚一ツツゝさへ配らぬやうにありはて
 賑やさそ父上や母上が草葉の蔭からゑらひごとくとうきやと思ふて居やまやるて
 わらふと思へりこきか泣すに居らまふかやい 泣く

次「ヤイくくわいら泣たり笑ふたり人をあへくるのかいけたいか見ると

八「こんなありかたの事がどこにあらふと

次「何がありがたいいまくゝいわ

八「勿体ないそんな事いやんさいの

次「何の勿体さぬそ

八「何か忌々しほそ

次「何の勿体さぬ

八「何の忌々しい

次「さにか

八「なにか

月「ウハ、、、ユリヤたまらぬぞ ハ、、、臍かよれる 腹をのへへ轉け

て笑ふ八は泣く次郎の無闇に腹を立つてなして、三人とも倒れ伏す

攝州合邦辻脚本

故若竹笛躬原作

植木嘉七補綴

岡野美春全

玉手御前俊徳丸

父合邦朝香姫

合邦女房

本舞臺常足の二重舞臺上手一間の障子家体次に佛壇續いて張交の襖下手殺懸岡の處に入口の幕の内より合邦の佛壇に向ひ鉦を叩き其傍に女房住ふ此みへよろまゝもものにて暮あゝ

合 南無阿みたふつゝ 向ふと玉手御前出來り門口に衍み

玉 かく様

合 ヤアわりやまた死ぬる 合邦は立上りしか女房の方を見せしらぬこあし

玉 かく様 明て下さんせいさア ト叩く

女 合邦殿今こそ様は何とそいふてか

合 イヤ何共はやせぬソノ空耳であらふといの

女 イヤ空耳かゝらねともちらりと聞へた娘か聲ハテ合点のゆかぬ ト立つ

玉 そふれつゝやるはかく様からやのと明て下さんせつちとどさんす戻りまいた

女 いかア ヤア戻つたとは夢でないか健てあつたかヤソノ嬉まやく ト駈出る襦

合 ヤイくく 狼狽者肌ふれてもふれいても我子に不義を仕るけた畜生侍の身

高安殿か助けてねさやしやあか何の今迄存命てうかく 愛へ何ぞにこう

女 夫ても今のは儘に娘の聲

合 エ、またいふかア、かくすとどり願ひるゝいなし親はさいといはしても有事知つ

て娘か手から度々の合力金二人か命を貸ふたは皆是高安殿乃御厚恩其夫の目を

掠め畜生の心さけた娘假令無事て戻れたとて門はたも踏さまうか元來娘は切れ

て死たう今ものいふたか娘さうやそれこそ幽霊をきた氣味かわるふはさいか肉

縁の深い程死人にそれのいふいもの必ず門の戸明まいる

女 イヤくく 幽霊はねるか狐狸の化たのでも一度見たい娘か顔もーやれそる

まいものをあつて目を回して死たら仕合せいとまかはい子と先立て生て業を

さらさふより一目みたいわいの トふり切て立つを又引留め

合 ハテわるい合点狐狸か幽霊おれはまたまもし密夫の娘から高安殿へ義理の言

譯以前は刀を指した役親に手にかけて殺さにやあうぬそれかいやさに留るのしや

玉 ト三人の歎くこさー

合 どの様のお腹立た憎しみの御尤是にの段々言譯おれと人目を忍ぶ此身の上マア

女 こゝあけて下さんせいさア

合 アレ聞てか合邦殿い譯かあるといの聞てやつて下さんせハテ娘とあもへは義

理もかける幽霊を内へ入るに誰に遠慮をあるまいぞ

合「いか様のふ此世をはなれたものなまは世間炎燗る事もさいそんさう早ふ呼込て
 茶漬ても手向てやりや可愛や立寄所はさー幽霊も賑ひたるかる ト身を背け
 て泣く女房は悦ふこそー
 女「そんさう早ふ明てやりまー上ヤレ〜可愛さうに ト門口をわける

仮名手本忠臣藏脚本

| | |
|--------|---------|
| | 故竹田出雲原作 |
| | 岡野美春補綴 |
| | 植木嘉七全 |
| 大星由良之助 | 崎阪伴内 |
| 寺岡平右衛門 | 大星力彌 |
| に かい ち | 千崎彌五郎 |
| 矢間十太郎 | 竹森喜多八 |
| 斧九太夫 | 仲間大勢 |

本舞臺常足の二重上手一間の障子家体正面一体に暖簾をかけ下手障子にて見切り其下板扉の張物例の處に門口あり總て祇園一方の体幕の内より伴内九太夫の二重の上に住ふ此みへ賑やかある鳴物にて暮わく

九 ナント伴内殿由良之助う体御らふいたる

伴 九太夫殿ありやいつそ氣違ひてゐる段々貴殿より御内通あつてもあれ程にあふふとの主人師直も存せず拙者に罷上つて見届心得ぬ事あらん早速に送らせよと

九 申付まゝたか扱く我もへんも折まゝてゐるシテ悴力彌めは何と致したる

九 こいめを折節此所へ参り共に放埒指合くらぬうふしきの一ツ今晚の底の底を捜見んと心工みを致して参つた密々に御咄し申そうイヤ二階へ

伴 先々

九 然らばかうお出ささま ト兩人の這入る此時向ふより彌五郎喜多八平右衛門

の三人出來り

十 彌五郎殿喜多八殿こそか由良之助殿の遊び茶屋一力と申のでゐるコレサ平右衛

門よい時分に呼出そう勝手に扣へておいやれ

平 畏り升た宜まうお頼申升る ト下手へ這入る

十 誰とちよと頼たい

○ 「アイくどきた様まやへ

十 「イヤ我々は由良殿に用事あつて参つた奥へいらふには矢間十太郎

彌 千崎彌五郎

喜 竹森喜多八てござる

彌 「此間より切々迎の人を遣いますれどもお歸のさいゆへ三人連て参升た

喜 チト御相談申さ給はあらぬ儀かゝる程にお逢おさまで下されとさつと申てくれ

○ 夫は何共氣の毒てござんす由良様の三日以來香續けお逢おされてのらたわいはあるまい本性はさいえへ

十 ハテ扱まめそうぬふておくりやれ

○ アイく

十 彌五郎殿ね聞かされたか

彌 承てめて態き入まゝた初の程の敵へ聞する計畧と存りましたかいろいろ遊びに實

喜 何と喜多八か申た通魂か入かはめてござらふかのいつそ一間へ陥込

十 イヤくどくと面談致した上

喜 成程然らば是に待ませふ

御所櫻堀川夜討脚本

故

三

好

松

洛

原作

岡

野

美

春

補綴

植

木

嘉

七

全

武藏坊辨慶

侍

從

太

郎

ね お さ

卿

の

君

娘 しのぶ

花

の

井

秘 大 勢

本舞臺二間常足の二重金襖を建て上下共む透骨障子家体總て侍従太郎館の体幕の内より二重茵の上に卿の君は住ひ曲縁に寄る傍には花の井下手に侍従太郎おわさまのふ姫大勢上下に別れ並居る此みへよろましく管絃にて暮あく
ト向ふ戸屋の内に

○御上使の御入り

太「何上使の御入とな トみさく／＼出迎ふ太鼓謡にて向ふより辨慶出來り花道升形にて立留り會釋し二重に通り卿の君に一禮する

太「武藏殿にハハ役目御苦勞に存る

辨「ナ、存一たどの違ふて御顔色もみつ／＼と御機嫌の体先安堵仕る

卿「ナ、我君ふを御機嫌よくましますか

辨「ハ、其御仰の健さこそ迎も侍従殿御夫婦ハ御介抱御大切にござる、御苦勞の甲斐か見へ祝着ふ存る

太「是の／＼御挨拶御主人なら御出産ある迄ハ我館に預る卿の君様義經公の御前幾重にも御取成

辨「ア、イヤ／＼取成に及ハぬ物事取さしといふハかなれハ合ふ事を十分にいふか取な一此辨慶夫さらい見た通を罷歸り眞直に申さハ君にもささや御満足ヤ是か

らは御夫婦への嘶ておい後學のため卿の君へ御物語り ト是よりあつらへの合方とあり

「總して勇士の戰場へ趣時ハ三忘と申て忘るゝ事三ッあり國を出る時家を忘れ境を過る時妻子を忘れ敵陣に望んでハ我身を忘る婦人の懐胎も先その如く既に月みち御産の緒を解るゝハ勇士の敵陣へ欠入て首を取る取らるゝハよい子を産か得産ぬか生るか死う生死の境サこゝをよく御合点おされ兼ておき身と思一召ハ其機に望んで下覺を取らぬヤア柏子に乗て馬鹿な事をハ、ハ、扱肝心の御内談遅おはるこハはハちか密々に御意得た一あれに見馴ぬ女コリヤ／＼あまや何者た

己「ハイ／＼私ハわさと申てこれあるおまのふか母卿の君様を御見舞に参り一者てムリ升

花「今あの者か申通り我家の奥勤を同事憚りおからか心置かく御内談辨「ア、イヤ／＼彼を始め女中方間を隔遠慮めされサア君様奥方侍従殿奥へ参らふ

太「イヤ御通りおされませう ト卿の君を先に侍従花の井辨慶ハ這入る

明治廿七年八月十二日 印刷
同 廿七年八月十六日 發行

〔定價四錢〕

版權
興行權
所有

兼發行者

大阪府西成郡曾根崎村
番外十八番屋敷

岡野美春

大阪市西區江戸堀南通四丁目
百番番屋敷

著作者 植木嘉七

大阪市北區源藏町三拾貳番屋敷

印刷者 秦小一郎

